

る也。きやはん色多分こんのしゆす也。但茶の色にても着用の例有之も、はゞき色不定○中

一同説○宗幡物語 きやはんも、はゞきは、北野御經御聽問より花頂の花御覽までせられ候也。又飯

川能登殿は、三月二日三寶院殿へ御成迄せられ候。三月三日よりせられ候はず候よし候○中

一當御代八幡御社參之時、右京兆分注より十八人、自典厩二人、已上廿人參、其時は先規にも不立

入、公方様御幼少の事にて、諸事御異見被申候時分の儀候而押付候て走衆の前へ被參候様體故

實以下私さま候はんとて、波々伯部兵庫所へ飯能○飯川能登守をよび候て尋申、雨ふり候てきやはん

をとり候へばも、はゞきをもとり候哉と申、中々の事、其分候其證據には、天氣不定に候へばも

もはゞきをば仕候て罷出、仍すはう著ながら取候やうのこしらへやうあり、うしろのたてあげ

をみじかく仕候へば、くりこして足ぬかれ候物に候、足をぬき候てそのまゝ置候べし、たてあげ

ながく候へば、其まゝはぬがれぬ物にて候由申來候然ばも、はゞきをも取候證據分明候哉、大

館與州常興、右京兆衆はも、はゞきを仕候由不審存候、其事少々相尋候衆々は、藤民部、後藤佐渡

守などに相尋候分申傳候由、返事候へば、残りの衆も與州意見候て、皆とらせられ候つるとて候、

飯能物語候也、○中

一きやはんも、はゞきの事、きやはんはまゆすにかぎり候、色黒、又茶、ねづみ、色などにて、もこし

らへ、藤民部殿、後藤佐渡殿など、着用候由ニ候も、はゞきは、どんす、あや、以下、又こうばい、くち葉

已下のおり色、但紅梅は御小者杯の様なるとて被嫌候、乍去若衆などは、さも候てよく候はんや、

〔婚禮法式〕上 婚入之部

四幅袴の下には、きやはんをする也、すべて股立をとりて、赤すねの見ゆるは尾籠なる故、侍は縹子○のきやはんをする也、興昇の人夫杯は、きぬ、又は布○のきやはんをすべし、

〔軍用記〕はゞきの事